

約束の花弁

茜咲 桜狐

で羽を伸ばせるのだ。

ベンチに座ると膝の上にクロスを広げ、寮で配られる  
レーションと野菜ジュース、パンを出す。食べるものが  
これしかないというわけではないが最低限栄養が補給で  
きれば良いので毎日この三つを食べている。

中庭、色とりどりの草花、白いベンチ。昼休みの私の  
定位置だ。中庭を見渡しても私以外には人はいない。そ

「こんにちは、あなたリーベさん……ですよね？」

れもそのはず、この教会兼学校の構内には大きな食堂も

ツゴフツゲホッー

あり、大抵の生徒はクラスメイトや知り合いとそこで食

私以外、誰一人いない……はずだった。

べているし、他にもカフェスペースなどの昼食をとるの

に向いた場所はいくらでもある。しかし私は昼休みのチ

「わっごめんなさい！ 驚かせるつもりじゃなかったん

ヤムが鳴ると決まって毎日ここに来る。ここに来れば

です！」

クラスという鬱屈とした集団から一旦解放されて、一人

驚いてむせ返った私に彼女は慌てて頭をペコペコ下げて

きた。

「ええ、こちらこそごめんなさい。まさか人が来ると思  
ってなくて……」

呼吸を落ち着かせると、声が聞こえてきた方向に振り  
返った。そこにいたのは、見覚えのあるブロンドの髪色  
のロングヘアの女子。

「あなたは——同じクラスのアトラさんよね。私に何か  
御用が……？」

「わ、そうです！ 覚えてくれていたんですね。うれし  
いです！」

彼女はてのひらを合わせてにこにこしながら話を続  
ける。

「あ、すみません用があるというわけではないのです

が、あなたとお話してみたくて！ たびたびお昼にここ  
にいるところを見かけていたので、話しかけてみたので  
す。あ、お邪魔でしたか……？」

にこにこした顔から、邪魔ではないかとはっとしたよ  
うに心配そうな表情でのぞき込んでくる。

「別に、ご飯食べてただけだから。邪魔ではないけれ  
ど」

ベンチの左側に寄って、空いたところを彼女に勧め  
る。

ありがとうございます、と言って彼女は空いたところ  
に座る。

「それで、私と話してみたいって珍しいね。特に面白い話題はないのだけれど」

「なんというか、雰囲気は凛々しくて、どんなことを考  
えてるのかなって気になって……あまり周囲との関わり  
もないようですし……ああいえ！ 貶しているわけではな  
く！」

と手をブンブンと振ってそんな意図はないと主張しな  
がら、表情豊かに話してくれた。

「ふふっそうね。確かに、私はほとんど周りの人間と関  
わりを持ってないわ。でもそれが凛々しく見えていたと  
は……」

あまりにも素直に言われたものだから、思わず笑いが

こみ上げてきてしまった。

「えへへ、私からはそう見えてました！ それで、お友  
達になりたいな、なんて……」

彼女はすこし照れたように俯く。

「いいよ。私でよければ、これからよろしく」

と言って微笑むと、

「ありがとうございます！ よろしくお願いします！」

と言って目を潤ませ、彼女は私の手を取りぎゅっと握  
りしめてきた。

こうして私と彼女の日々が始まった。

私のことが気になる、という彼女の言葉は本当だった  
ようで、自由時間になればすぐに私の元へやってきては

いろいろなことを話している。以前は一人で食べていた

昼食も、気づけばいつも二人で食べるようになってい

た。二人になってからも場所は変わらず、中庭の白いベ

ンチ。ほかに人はおらず、昼下がりの温かな風が二人だ

けを包む。今まで人とあまり関わりたくない理由に、距

離感が図れず関わるだけで疲れてしまうからだった。で

も彼女――アトラからは不思議とそれを感じない。きっ

と彼女が疲れない距離感を維持してくれているのだろ

う。そのおかげか、私たちはだいたいぶ砕けたしゃべり方を

できるようになってきた（あくまで私基準、だけれ

ど）。そして私から話題を出すことも多くなってきてい  
る。

「アトラは私と食べる時いつも弁当を持ってきてるよ

な。自分で作ってるのか？」

彼女の太ももの上にはアルミのお弁当箱。その中には

野菜や肉、炭水化物がバランスよく敷き詰められてい

る。

「そうだよ。前までは毎日ではなかったんだけど、リ

ーべさんとお昼食べるようになってからは毎日作るよう

になったんだ。そうだ！ リーべさんの分も作ってき

ていいですか？」

アトラは閃いた！ とでも言いたげに目をキラキラ輝

かせ提案してきた。そんな純然たる瞳をきらめかせた可愛らしいアトラの提案を断れるわけもなく、私自身もアトラのお弁当を食べてみたいと思っていたので、今度作ってもらうことにした。

### 三.

最近の私の一日は、数学、語学、神学、歴史学などを学び、自由時間はほとんどアトラと一緒に過ごし、そして最後のホームルームを終えると寮へ帰るとい生活サイクルになっていた。

いつもはふわっとした流れで終わる、最後のホームルーム。しかし今日はいつもとは違い、始まる前から先生

の表情はこわばったような、悲しいような、そんな表情をしていた。

他の生徒もその雰囲気を感じ取り、静まり返っていた。

キーンコンカーンコーン――

ホームルーム開始のチャイムが鳴り、先生が目を伏せがちにしながら口を開く。

「皆さんご存じの通り、以前徴兵されました、このクラス最年長のイザベルさんですが……先ほど、戦死したとの伝令がありました……彼女の安息を、お祈りいたしましょう……」

その言葉は教室中を駆け巡り、皆無言で祈りを始め

る。

——そう、今現在、私たちの国——いや、この国の国教となっている宗教は異教との戦争の最中なのだ。この

戦争は私たちが生まれるずっと前から続いていて、いつ終わるのかもわからない。この学校では<sup>よわい</sup>年齢十八を過ぎ

た四月、徴兵され戦場へ出なければならぬ。教会直属

の学校であり、もともとほとんどの生徒が孤児や何らか

の家庭の事情でこの学校に来ているため徴兵するのにも

都合がいいのだ。寮と構内の施設だけで生活できるほど

充実しているのも生徒の環境に合わせられているもの

だ。

そのまま今日のホームルームは終わり、放課後、中庭

のガゼボのベンチにてアトラと話していた。

「あのイザベルさんが死んじゃうなんて、信じられないよ……。私たちのまとめ役をやってくれて、とても信頼

できる人だったのに……」

アトラはうつむいたまま、今にも泣きだしそうな声

でつぶやく。

「そうだな……イザベルさんが亡くなってしまおうとは……

……それだけ、過酷な環境なのか……」

アトラの背中をゆっくりとさすりながら話す。

戦場に出るということは、常に死と隣り合わせなの

だ。たとえばそれが優秀な人間でも。戦争である以上、仕

方のないことだろう。

「ね、リーベさん。私たちも、来年にはあの人と同じように、戦場に出て戦わなくちゃいけないんだよね……」

制服のスカートをぎゅっと握りしめて、わずかに震えた声で、アトラは言う。ちょうど西日が差しこんで、ア

トラの表情を直接知ることが出来ないが、不安に満ちていることは伝わってくる。アトラの肩に手を回し、そっと抱き寄せる。

「大丈夫だ。たとえ戦場に出ても、私も一緒だ。共に生き抜こう」

「ありがとう、リーベさん。あなたがいてくれて良かった……」

そう言ってアトラは私の肩に頭を預けた。

それからしばらくして、アトラが落ち着いてきたところで寮に帰った。

#### IV.

それから時は流れて、私たちが徴兵されるまで後半年となったところで、本格的に戦闘に関する知識と実技を学んでいくことになる。

まず、私たちの宗教では神様に祈りを伝え、その思いに答えてくださった神様が加護をもたらしてください。

その加護により様々な超常的な現象を起こすことができるが、通常は戦闘用に使うものでなく、例えば水不足を解消したり、建物の補修の補助やけがの治療をしたり、

平和的に用いられるはずの力だ。しかし現在行われている、宗教戦争ではそんなことも言っていられない。これは我々の神を護るため、信じるものを奪われないための

闘争なのだ。戦争における加護の使い方は通常の利用方法とは異なり、戦闘以外で用いることは禁止されているため、専用のカリキュラムが用意されている。戦闘員は主に後方部隊、歩兵部隊、航空兵部隊に分けられ、遠距離部隊としては雷の加護、防壁の加護、千里眼の加護など、歩兵部隊では身体強化の加護、先見の加護など、航空部隊では飛翔の加護、風の加護などを用いる。そして支援部隊では治癒の加護、伝令の加護などが主に利用されている。これは異教徒も同じであり、加護の種類は違

えど、同じように様々な力をつけている。

そして座学の後には、実際に自身に加護を降ろし、戦闘の訓練を行う。

戦闘訓練の休憩時間。壁に寄りかかって座り水分補給をしているとアトラがやってきて、疲れた〜と言いながら私の横に座る。

「はあ……でもこうしていると、戦争がすぐそばに来ているような感じで、怖いな」

アトラがぼつりと言う。

「そうだな、戦争がすぐそこまで来てる。生き延びるためにもしつかり訓練を積まないといけないな」

アトラを護るためにも。心の中でそう付け足す。

V.

冬が終わり、陽光が街に差す。

寮にある私の部屋にも、カーテンの隙間から温かな日差しが差し込む。そんな今日は四月一日。私たちが戦場へと送り出される日だ。

カーテンを開け、日の光を浴びながら体を伸ばす。軽くストレッチをして、朝食を食べる。いつもと同じ、寮内で配布されるレーションを食べる。ほんのり味のついたパンにレトルトのサラダ、そこにホットミルクを作る。いつもと同じ朝食。しかし、妙に落ち着かない。アトラは今何しているのだろうか、などと考えて気を紛ら

わせる。そうして準備を終えて、校舎へと向かった。

集合場所となっている広場に行くと、まだ集まっている生徒はまばらだった。少し散策していると、私を見つけたアトラが駆け寄ってきた。

「おはよう、アトラ。よく眠れたかい？」

「おはよう、リーベさん。」

体調は万全よ！」

言葉の通り、アトラは顔色もよく元気そうだった。

それから今回徴兵されている生徒が全員集まり、式典を執り行くとシャトルバスで二十人ほどの班に分かれてバスに乗せられた。幸い私とアトラは同じ班だったの  
で、二人席に座る。

隣に座るアトラを見ると、体調に問題はなくても、やはり緊張や恐れが体に出ていた。強張り震えるその手に私の手を重ねて、

「私もついてる。二人なら大丈夫だよ」

アトラに優しく語り掛けるように言って、それと同時に自分の心も落ち着いていくのを感じた。私にはアトラがいる。二人なら、助け合えばどんな困難にも打ち勝てる。

うん、とアトラは小さくうなずいて、私の手を握り返した。

そうして何時間かバスで揺られると、後方部隊の基地にたどり着いた。降りると、当然ではあるが、学校周辺

での景色との違いに、思わず私も身震いする。

岩をくりぬいたような場所に、淡い光のランタンが吊るされ迷彩の大きいテントが奥へと続いている。その中の特に奥の方の幕で区切られた大部屋へと案内された。

中は会議室のような作りになっていて、私たちの班が全員入っても余裕のある大きさだった。概要を伝えられるとこの日は解散となり、用意されていたそれぞれの待機部屋へと向かった。

部屋に戻ると、先にアトラがいた。何やらリュックの中をガサゴソしたかと思うと、テーブルクロスとお弁当箱を取り出した。

「今日も、作ってくれていたのか」

少し驚きつつ声をかけると、

「はい！ こういう時こそ、いつも通りのものを食べたほうが良いと思って。もちろんリーベさんの分もです」

アトラはニコニコとしながらクロスを広げて、隣に座ってとジェスチャーしている。

「ふふ、ありがとうアトラ。一緒に食べようか」

場所は変わっても、いつもと同じように食べられるというのは、なんと幸せだろうか。食べているうちに、だんだん身も心もほぐれてくる。気づかない間に私も緊張していたらしい。

「リーベさんはさ、やっぱり強いよね。私が緊張で押

しつぶされそうな時も、不安でいっぱいなときも、あなたが勇気づけてくれたおかげでここまで来れた」

お弁当を食べながら、アトラがぼつぼつと話し始めた。

「それはお互い様だよ。私も、アトラがあの時声をかけてくれたから毎日が楽しくなって、独りでは体験できなかったことをたくさんできた。私が強いわけじゃない、君が私に強さをくれたんだ」

アトラの方を向き直ってそう言うと、アトラは食べていた手を止め、しばしポカンとした後、私の胸にぽふんと飛び込んできた。

「わ、どうしたんだアトラ!？」

その突然の行動に驚いたが、私の腕の中でアトラは顔を上げると、

「それはずるいです！ 責任取ってください、もう離れませんかから」

少し涙目になって頬を膨らませている。

「――ありがとう、アトラ。これからも私と共にいてくれ」

と返すと、アトラは嬉しそうに私の腕の中で小さくうなずいて、私はそのままアトラを抱きしめる。

そう、本当に、アトラと出会ってから私は変わったと思う。無駄と切り捨て、最低限のこと以外はしてこなかった私が、共に過ごすことに時間をかけることに喜びを

感じられるなんて思っていなかった。彼女がいなければ、

こんなにも楽しい学校生活を送ることも、それ以外の時間を楽しむこともなかっただろう。アトラは天真爛漫な性格で、私の心を優しく包んでくれて、いつでも温かな眼差しをくれる。私とは正反対なその魅力は、私に足りなかったものを満たしてくれていた――

それから改めてお弁当をしっかりと味わって、今日はしっかりと休息をとるため早めに就寝した。

## VI.

基地についてから何度かミーティング、シミュレー

シオンを行い、ついに戦地に出る時が来た。

私たちが配属されたのは歩兵部隊。前線での異教徒軍

と剣や格闘での直接的な交戦がある。

「アトラ、私から離れるなよ。危なくなったらすぐに下がる。いいかい？」

アトラはこちらを向いてコクリとうなずいた。

前線となっている草原ではすでに大規模な交戦が行われていて、そこに我々の班も加わる。先見の加護、俊足の加護、剛腕の加護、剣刃の加護を神様からいただいた

て、発見した異教徒との白刃戦に入る。一息に間合いを詰めて、下段からの切り上げで吹き飛ばす。その隙に近づいてきた敵はアトラが突風の加護で吹き飛ばしてくれ

た。

そうして、何度目かの交戦を行っていた時。不意に異教徒部隊の後方の方で一際明るい光がはじけるのが見えた。しかし目の前の敵の動きに対して先見の加護を使っていたため、私には知る由もなかった。それが敵の大規模な殲滅の加護の力であることを。その光を見たのとはほぼ同時、私の後ろにいたはずのアトラが、私を横から突き飛ばした。

「アトラ!? 何を――!?」

先ほどまで私がいた場所――そして今、アトラが立っている場所のはるか頭上から、光が降り注ぐ。後方部隊

の防壁の守護を貫き、降り注ぐその光が、アトラの身を焼き焦がしていく。

「リーベさん……生き、て……」

絶望の光を、その一身に受けながらも、アトラは私に笑顔を向けて、そう言い残し、完全に消滅した。

## VII.

戦場の一角。ブロンドの髪の少女は、共に戦っているもう一人の少女のサポートをしていた。もう一人の少女は敵と剣を交え、その隙を狙ってきた他の敵は、ブロンドの髪の少女が突風の加護で弾き飛ばす。彼女は、その身に受けた先見の加護を、もう一人の少女に使っていた。

その少女の動きを先読みすれば、サポートがより正確にできるからだ。しかしその加護で見た数秒先の未来は残酷だった。もう一人の少女が空から降り注ぐ光にその身を焼かれ、消えていく。そんな未来が。

それを見た瞬間、彼女は動き出していた。考えるよりも先に、その地点にいる少女を突き飛ばす。その少女を、最愛の人間を護るため。ブロンドの髪の少女はその光を一身に受けた。確実に死へと至る確信を持ちながら。それから数秒後、その場に残ったのは、突き飛ばされたときの体勢のまま、動けない少女一人だった。

VIII.

アトラ、アトラ——。何が起こったのかもわからないまま、その名を脳内で何度も呼ぶ。数刻前まで、そこにいたはずの少女の名を。アトラ——私の人生に光を与えて

くれた、最も大切な、私が今まで唯一愛した人。どうして、どうして。私がアトラを護るべきなのに。もう離れないと言ったのは君なのに。共にいてくれるとうなずいたのに。私の生活を変えてくれたのは君なのに——

それから遅れて、彼女の最期の言葉が脳内に響き渡る。

生きて、生きて、生きて、生きて——。

君がいなくなってしまったこの世界で、何のために、

生きればいいのか。かといって君が救ってくれた

この命を捨てるなんて、そんなこと、できないよ——

——そこで、一つの可能性に思い当たる。

「はは、あはは、そうか」

加護。それは願ったことに答えてくれた神様が与えて

くれる力。神様がその願いを承認すれば、与えられる。

それならば。

「ああ、神よ。私に力を。この戦争を終わらせられる

力をください——」

そう、願う。ただ一つ。それを。心から、すべての意

識を集中させる。

——汝、其れを欲するか。

——はい。

——汝、その代償にその身は人の領域を外れ、敵味方、善悪の境界も消える。

——構いません。

そして数瞬の後、これまでとは比にならない力がみなぎってくるのを感じた。全身には夜よりも深い黒の鎧、

右手にはどんな高温の炎よりも白く輝く剣。ツバサ

これなら、私はもう絶対に死なない。危害を加える人間を殺し尽くす。アトラに救われたこの命を落とさないために。

「アトラ、私はあなたを愛し続けます」

その場に片膝立ちでひざまず跪き、目を閉じ、手の甲にキス

をするポーズをとる。

そうして再び目を開け、目前にいる人間に狙いをつける。百メートルはありそうな距離を一步で詰め寄り、同時に胴から真つ二つに斬る。すぐに次の標的を見つけ、一撃で屠る。それを、何度も、何度も、誰もいなくなるまで。

## Ⅹ

その日、数十年続いた宗教戦争は、一日で終わった。二つの軍、どちらが勝ったというわけでもなく、両軍合わせて一人残らず死亡との報告だけが観測部隊によってなされた。どうしてどちらも誰一人として生き残ったも

のはいなかったのか、それを知る者は誰もいない。